

## 中学校・高等学校における 楽曲分析の意義と可能性

東京学芸大学教務補佐員  
及川 慶太

### 1. 研究の目的

楽曲を聴取する方法は、楽曲を全体的に捉える感覚的聴取と楽曲を特定の要素に着目して捉える分析的聴取の大きく2つに分けられる。

分析的聴取は感覚的聴取では捉えられなかった楽曲細部の認識や楽曲を複数の側面から捉えることを可能にする。分析的聴取は、音楽を学ぶ上で重要かつ有効な聴取方法のひとつとして、音楽を専門に学ぶ際に取り組みされてきた。平成20年度告示の学習指導要領・音楽に「共通事項」が設置さ

れたことよって、音楽科においても構成要素に着目して楽曲を捉える分析的聴取の実践が行われるようになっていく。しかし、分析的聴取に留まらず、さらに楽曲分析へ取り組みることよって、より深い音楽的事象の把握が可能になると考えられる。しかしながら、楽曲分析は、多くの予備知識を要するため、中学生や高校生が楽曲分析に取り組みには課題が残されている。本稿は、中学生や高校生が楽曲分析に取り組みのために、どのような課題があるか、また指導者が指導法を工夫する点がどこにあるか

を明らかにする。

### 2. 楽曲分析の定義と可能性

#### (1) 定義と過程

本稿では楽曲分析を「楽曲を構成要素と形式の部分に分け、その機能や相互作用を明らかにすること」と捉える。

音楽分析家のデイター・テ・ラ・モッテは、彼の著書の中で楽曲分析の過程を①細部の認識、②諸関連性の把握、③分析の構築と言語

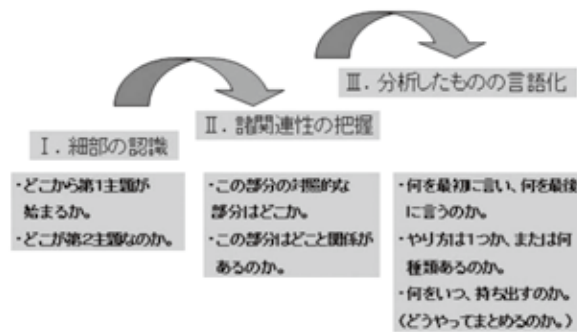


図1 楽曲分析の三重の課題

による表現の3点に整理し、これらを楽曲分析の「三重の課題」と名付けている。

即ち、楽曲分析は、第一の過程として、旋律や和声、強弱や音色といった特定の音楽構成要素、またはモチーフ等の細部に着目する楽曲聴取が行われる。その後、捉えた細部同士の関係性(反復、対照、等)を明らかにする第二過程を経て、最後にそれらをまとめる第三の過程を行い楽曲分析は完成するのである。

#### (2) 楽曲分析の必要性と可能性

西洋芸術音楽はモチーフや調構造が楽曲の中で相互に関わりを持ち、それらよって楽曲が構成されている。

このように構造的に作曲されている音楽を理解するために、楽曲分析は必要である。

楽曲分析は、「三重の課題」の①細部の認識、②諸関連性の把握を促進させる点から有効である。楽曲分析によつて、楽曲の細部や

時間的な間隔によって把握が困難なモチーフの相互関連など、分析的聴取のみでは捉えきれなかった音楽的事象が明らかになる。

### (3) 音楽教育における楽曲分析

ベネット・リーマーは、授業における歌唱・器楽・作曲等の活動全てに鑑賞と分析を含むという考え方を示している。

このことは、すべての音楽活動において楽曲分析が関わる可能性を示している。

また、リーマーは音楽教育における楽曲分析に関して、次のような動詞を挙げ、これらが「分析の過程として記述されうる」と述べている。

「示す、討論する、操作する、比較する、記述する、定義する、調べてみる、分類する、修正する、配列して直す、作り直す、変化させる、統合する、対比する、展開する、検査する、観察する、敷衍する、再構成する、

特徴づける、推測する、取り出す、明瞭にする、明示する、評価する、識別する、想起する、原因を探る、創意工夫する。」(リーマー(1970) pp. 206-207)

以上のように楽曲分析を行う過程には、楽曲を探索する作業が多く含まれている。よって、楽曲分析に取り組むことは、音楽を探索する過程として学習者に経験されると考えられる。

### 3. 楽曲分析における課題

中学生や高校生を含む学習者が楽曲分析に取り組む際の課題として、(1) 分析過程の多層性、(2) 分析に必要な予備知識の2点が考えられる。

次に、この2点について考察していく。

#### (1) 分析過程の多層性

モツテの「三重の課題」において述べたように、楽曲分析の過程

は大きく3つの課題を解いていく複数の過程によって構成されている。学習者への指示にあたってはこの多層性に留意して計画を立てる必要がある。

図2は、楽曲分析における過程を「鳴り響く音楽」、「楽譜」、「分析」という3項から捉えたものである。楽曲分析は、これら3項の間を絶えず往復することによって成り立っている。

西洋芸術音楽を分析する場合、

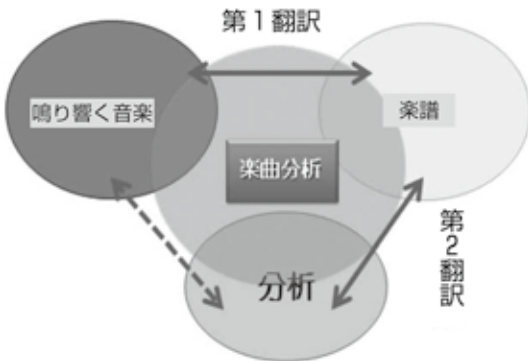


図2 楽曲分析における二重の翻訳

楽譜を対象に分析を行うことが多い。しかし、「鳴り響く音楽」と「分析」の間に「楽譜」が介在することにより、「鳴り響く音楽」と「楽譜」間の第1翻訳、「楽譜」と「分析」間に存在する第2翻訳の、2つの過程が楽曲分析には必要になる。

図2における第1翻訳は聴覚的情報としての音楽と、音楽の視覚的情報としての楽譜との翻訳である。また第2翻訳は、視覚的情報としての音楽から音楽的事象や分析結果を記述するといった過程を指している。

「鳴り響く音楽」と「分析」の間における点線の矢印は、楽譜を経由せずに鳴り響く音楽そのものから得られる分析結果と、分析結果を音楽が鳴り響いた状態で確かめる必要があることを示している。

生徒に対しては、このような二重の翻訳における分析過程と、三重の課題を理解した上で楽曲分析の学習指導の手立てを考えなければ

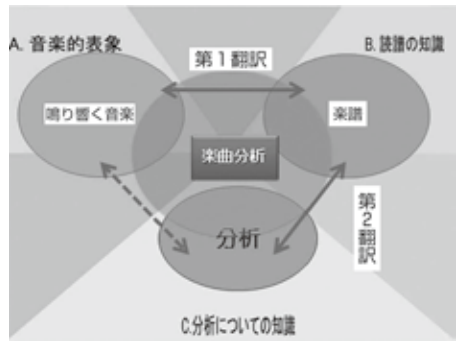


図3 楽曲分析の予備知識

ばならない。

(2) 楽曲分析に必要な予備知識

楽曲分析を行うには多くの予備知識が必要になる。本稿では楽曲分析に必要な予備知識を前述の二重の翻訳における3項を基にして考察する。図3は、二重の翻訳の3項それぞれの予備知識を示したものである。

「鳴り響く音楽」に関連して「音楽的表象」、「楽譜」では「読譜の知識」、「分析」では「分析についての知識」が必要な予備知識として

て考えられる。

これらの予備知識を学習者がどの程度持っているか把握すること、楽曲分析に必要な予備知識をいかに学習者に与えるかが、授業計画の際に重要となる。次にそれぞれの予備知識について考察したい。

A. 音楽的表象（楽曲の知識）

これは「鳴り響く音」としての楽曲把握を指す。楽曲が頭の中で流れる状態が、音楽的表象を有している状態であると考ええる。

音楽的表象は、鑑賞や歌唱等の音楽経験の積み重ねによって培われる。学習者が既知の曲を分析対象曲とすることにより、音楽的表象が形成された状態で楽曲分析に取り組むことが可能になる。

B. 読譜の知識

音楽を専門としない学習者の場合、読譜そのものが大きな問題となり、そのために、楽曲分析をあらためなければならぬという事

態が起り得る。しかし、図形的な楽譜、パワーポイント等、五線以外の視覚的資料の使用により、読譜の問題を軽減させることができる。

また、音楽を専門に学ぶ者にとっては日常的に用いられる用語でも、学習者にとっては未知の用語も多く存在する。よって、音楽の専門用語を分かりやすい形で提示すること、事前の学習の有無の確認等も楽曲分析を成立させるために必要なものとなる。

C. 分析方法

全ての曲に同じ分析方法を用いることはできないが、分析の大きな流れの把握は分析にあたって不可欠なものである。また、「分析」の予備知識を得ることは、音楽の探求方法を知ることになるため、学習者にとって重要な意味を持つものと考えられる。

授業者は分析対象曲の特色や、授業のねらいに応じて適切な分析方法を選択し学習者に解りやすい

方法で呈示することが重要である。

4. 楽曲分析の活動モデル

ここまで楽曲分析に必要な「鳴り響く音楽」「楽譜」「分析」の予備知識について考察してきた。しかし、これらの予備知識を持っているだけで楽曲分析は成立しない。

楽曲分析が成立するためには、それぞれの知識の相互関連が必要になる。よって、学習者が楽曲分析に取り組むには、この3項を繋げる活動が設定されなければならない。

図4は、3項を繋ぐ活動をモデルとして示したものである。

「鳴り響く音楽」と「楽譜」の間には「楽譜を伴う楽曲聴取」、「楽譜」と「分析」の間には「分析的読譜」、「分析」と「鳴り響く音楽」の間には「分析的聴取」を設定した。

授業においては、これら3つの活動（楽譜を伴う楽曲聴取、「分

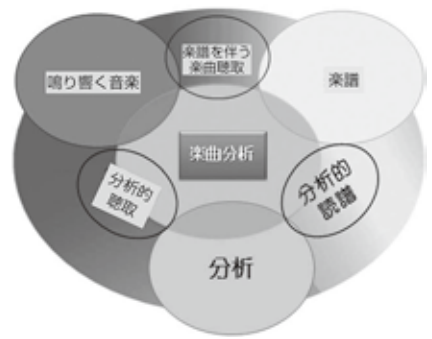


図4 楽曲分析の活動モデル

析的読譜」、「分析的聴取」が主要な活動となる。

### ○楽譜を伴う楽曲聴取

楽譜を伴う楽曲聴取とは、「鳴り響く音楽」を聴きながら、楽譜を見て、今楽譜上のどの部分が演奏されているかが分かる、あるいは逆に、楽譜を見て、鳴り響く音としての音楽が浮かぶような状態を目指した活動である。つまり、聴取した楽曲と視覚的情報を繋げる活動を指す。

この活動として、「楽譜を見ながら楽曲を聴く」、「楽譜を見て歌

う」「楽譜を見て楽器を演奏する」といった例が挙げられる。

### ○分析的聴取

分析的聴取とは、楽曲の細部やある特定の音楽構成要素に着目して楽曲を捉える聴取活動であり、漠然と全体的に捉える楽曲聴取とは異なる。

例えば、「第1主題のみを聴く」、「楽曲中の『音色』に着目してその変化を聴く」などの活動が、分析的聴取に相当する。

### ○分析的読譜

分析的読譜とは、楽譜のある特定の一部の音楽構成要素に着目して読譜を行うことである。

例えば、デユナーミクという音楽構成要素の一つのみに着目して楽譜を読んでいく、合唱曲において声部ごとに楽譜を読んでいく、などといったものが分析的読譜にあたる。

中高生にも取り組める分析的読譜の活動としては、「強弱記号に

色を付ける」、「ソプラノ声部に色をつける」といった活動が考えられる。

### 5. まとめ

音楽の授業において楽曲分析に取り組むためには、先に挙げた3つの観点（「音楽的表象」、「楽譜の知識」、「分析の知識」）から、学習者の持つ予備知識を把握することが重要である。また、学習者が既に持つ予備知識が活用されるように授業を計画するという考え方も必要である。

授業における活動は、「楽譜を伴う楽曲聴取」、「分析的聴取」、「分析的読譜」の3項を基に計画することで、授業において楽曲分析が成立すると考えられる。中学生を対象に行った実践例に関しては、別の機会に報告したい。

### 【主な参考文献】

- ・デイター・デ・ラ・モツテカール・ダールハウス（共著）1983年 入野義朗訳『音楽

の分析 テキスト編」東京・全音出版社

- ・ハンス・U・フス 2004年 原田宏司訳「音楽の分析」
- S. ヘルムスR. シュナイダーR. ヴェーバー編著 河口道朗（日本語版監修）『音楽教育学要論』東京・開成出版
- ・ベネット・リーマー 1970丸山忠璋訳『音楽教育の哲学』東京・音楽之友社
- ・及川慶太 2013 『中学校における楽曲分析の意義と構想——合唱祭の指揮者と伴奏者を対象にした実践——』（東京学芸大学修士論文）